

コース概況

〈愛鷹山の特徴〉

愛鷹山は裾野市、駿東郡長泉町、沼津市、富士市にまたがる成層火山である。愛鷹山が火山であることは、すそ野を広げたその姿からすぐにわかるが、浸食がすすんでいるため実際には火山というよりは一つの連峰といった方がふさわしい。主な山頂は北から越前岳(1504.2m)、呼子岳(1310m)、鋸岳(1296m)、位牌岳(1457.5m)、袴腰岳(1249m)、愛鷹山(1187.5m)と続き、これが主脈である。この主脈とは別に、呼子岳から南に伸びる尾根には大岳(1262m)、越前岳から東北東へ伸びる尾根の末端には黒岳(1086.5m)がある。黒岳は寄生火山的存在で、最も新しく浸食もあまりすすんでいない。山頂部分で火山の痕跡を残しているものは少ないが、鋸岳の北面と南面はそれぞれ爆裂火口跡で、今回のコース上からは南面の大岳、呼子岳、鋸岳、位牌岳に囲まれた須津川の源流部の火口壁を覗き見ることができる。また袴腰岳と黒岳は溶岩ドームだといわれている。すそ野の規模はさし渡し 15~20km もあり、もし富士山と同様な成層火山の形状を保っていたなら、2000~2500m の標高で富士山の横に聳えることになる。

愛鷹火山は、溶岩、凝塊角礫岩、降下火山灰(テフラ)を噴出しており、降下火山灰から推定された活動期は 24~23 万年前頃である。また、沼津方面の桃沢川、長窪には 2 枚の火砕流跡が見つかっており、その火砕流は 11~10 万年頃のものである。これらのことから、愛鷹山の火山活動は、伊豆半島衝突後の 40 万年前から 10 万年前とされ、箱根火山や富士山の土台である小御岳火山の活動期と重なっていたと考えられる。十数万年前にはこれら 3 つの火山が、いずれも円錐形の若々しい姿を持ち、ときに噴煙を上げながら駿河湾の水面にその勇姿を映していたであろう。その後、いったん休止した富士山が再び激しく活動し現在の富士山である新富士火山を形成したのとは逆に、愛鷹山の火山活動は衰え、有史以後は全く活動を停止した。このため浸食がすすみ、現在みられるような標準的な壮年期浸食による火山地形の連峰ができあがったのである。

〈愛鷹山の名前〉

愛鷹山は、古い資料(駿河志料、駿州名勝志、駿河国志等)ではいずれも足高山と書かれている。富士山の足元に聳える山という意味であろう。ウィキペディアには「富士山を中心に足高山、山梨県の足和田山、箱根の足柄山を富士三脚と呼んだ」とある。これとは別に端高から転じたという説もある。端高とは足高連山の南端にある一峰の意味で、はじめは愛鷹連峰の全峰を指した意味ではなかったが、その南端の一峰に桃沢神社を祀って愛鷹明神と呼び、いつしか端高が足高に、足高が愛鷹になり、全山を意味するようになったというのである。桃沢神社に残る古文書では永禄二年(1559 年)の文書では愛鷹を、元亀三年(1572 年)の文書では足高を用い、天正十八年(1591 年)の文書では再び愛鷹が用いられ、以後はすべての文書で愛鷹が用いられている。足利中世までは山を指すときには足高、神社を指すときには愛鷹であったものが、それ以後には両者とも愛鷹になったようである。

〈1 日目〉

桃沢野外活動センターのこんべいとうがスタートである。ヒノキの人工林の中の舗装道路を登っていく。道の脇には日向ではタケニグサやヨウシュヤマゴボウなどの毒草やイタドリ、ヘビイチゴが、日陰にはゼンマイ、ナツトウダイ、マムシグサなどが見られる。またヒノキの間に、アセビ、シロダモ、アオキ、アラカシ、ヒサカキなどの常緑樹、フサザクラ、ヤマアジサイなどの落葉広葉樹がある。金岡橋を過ぎ、道が大きく曲がるとアカガシやイタヤカエデやイロハモミジなどの大木が目立つようになり、やがて水神社の駐車場に着く。

水神社は正式には愛鷹教会水神社といい、日竜上人が桃沢川をたどりこの地に着き来る日も来る日も法華経を読み滝の水でその身を浄め修行していたところ、水神竜王尊すなわち竜が現れこの地に修行の道場を建立することを許したと伝えられ、明治 36 年に本堂、書院が建立された。

水神社の周辺は大木が多いが、道が屈曲するあたりからは再び、ヒノキの植林地となり、やがて第 1 ゲートに着く。林道は第 1 ゲートから右に大きく屈曲し、緩やかに登っていく。ヒノキの植林が主であるが、ホオノキや

アカガシ、マルバウツギなどが見られる。道が左に大きく屈曲すると、急登下である。標識を見落とさないように気をつけよう。はじめは林道とほぼ平行に緩く登っていくが、すぐにハコネザサの中の防火帯を一直線に登るようになる。苦しい登りではあるが、短いのであせらずに一步一步登っていこう。すぐに森林公園からの遊歩道にぶつかり（急登）左折する。ここからは幅5mはあろうかという芝の道になる。周囲は比較的若いヒノキの植林とハコネザサ、その中にアセビが目立つ。しばらくの緩い登りで、池ノ平山頂に到着する。

池ノ平の山頂にはたくさんのベンチ、展望台があり、クロツグミやウグイスがさえずっている。晴れていれば沼津市街や駿河湾が一望のもとに見渡せるので、ぜひゆっくり休んでいってほしい。コースはここで折り返し、森林公園に下る。急登を過ぎると、展望台やベンチがある小広場を通る。森林公園の最上部にあたるところで、リョウブ、イヌツゲ、林床にはワラビが目立つ。道なりに暗いヒノキ林に突っ込んでいき、擬木階段を降りる。森林公園の中は遊歩道が縦横無尽に走っているが、大会地図で赤く示されたラインにしたがって進む。突き当りを左折し、しばらく歩いて右折する。標識がしっかり整ったヒノキ林の中の遊歩道であるが、木の橋があり、濡れていると滑りやすいので注意が必要だ。すぐに左折ししばらくすると林道との交差点に出る。トイレがある。そのまま直進し擬木階段を降り左折する。トラバース道が終わり再び急な擬木階段になると森林公園駐車場に出る。ここが、1日目の体力審査等の終了地点である。周囲にはトイレや広場があり、サクラやツツジが植えられているがクロモジやリョウブも目立つ。

十分休んだら、選手はここからは舗装道路を桃沢に向けて下ることになる。相変わらずヒノキの植林が主体であるが、ハコネウツギ（ニシキウツギ？）が白やピンクの花を咲かせ、リョウブ、コナラ、ホオノキなどの落葉広葉樹の新緑が美しい。富士エースゴルフ倶楽部の入り口から道が広くなり、交通量が増えるので気をつけて進もう。ホテル長泉ガーデンなどのピンクの標識があるところで鋭角に右折し細い車道に入る。道はしばらくはほぼ水平であるがやがて左にカーブし下りとなる。右にカーブしさらに下っていくとやがて急な下りになりT字路につきあたり、桃沢の住宅地に出る。ここは右折し道なりに進むと右にヘアピンカーブし桃沢野外活動センターにつながる車道に出る。ここから緩い登り約600mでゴールの野外活動センターこんべいとうに着く。

〈2日目〉

第1ゲートまでは1日目のコースと同じである。昨日は第1ゲートを左に見ながら右にカーブしたが、今日は第1ゲートを抜けて直進する。すぐに砂利の林道になる。この辺りはカラスザンショウやヤマグルマの大木がある。桃沢橋を渡りイロハモミジ、ヤマアジサイ、フサザクラの目立つ林の中を進む。ハコネウツギやコガクウツギなどの花が目を楽しませてくれる。やがて第二桃沢橋を渡り、さらに進むとハシゴ場である。このあたりはヒノキ、スギの林になっている。すぐに柳沢橋^{やなぎさわばし}に着きそのすぐ手前が愛鷹山登山口である。標識がある。周囲を見渡すとイロハモミジ、マルバウツギ、コナラ、アカメガシワ、林床にはコアジサイ、イタドリが目立つ。

登山道といってもこの冬に行われた伐採のために作られたブルドーザー道であり、日影がなく、つらい登りである。しばらく我慢するとロープが正面をふさいでおり、ここで愛鷹山の標識にしたがって左の小道に入っていく。伐採地から樹林帯に入り、水平に進むと一つ目の渡渉地点に出る。ヒノキ林の中の暗いところであるが、ケルンや赤布をしっかりとどっていけば迷うことなく対岸に出られる。すぐにまた伐採地に出る、ヤマツツジがオレンジ色の花を咲かせ、コアジサイ、サルトリイバラが目立つ。伐採地を過ぎると尾根に出る。クロツグミ、ホトトギス、ヒガラ、ウグイス、ミソサザイなどの野鳥の声がひととき大きく聞こえる地点であり、ゆっくり耳を傾けてもらいたい。サンショウやミツマタの目立つ明るい林から再び暗いヒノキ林に入る。踏み跡がいろいろある。やがて沢を渡渉し左折する。赤布等がたくさんあるので迷うことなないだろう。ここから短い急登になる。雨が降った後はすべりやすく苦勞する。すぐに尾根に出て右折する。愛鷹山の標識がある。ヒノキ林の中にヒメシャラ、イヌシデ、ハコネウツギがある。この先は暗いヒノキ林の中のトラバース道になる。左下が急斜面になっているところがあるので注意が必要である。だんだん下り気味になるとスリル満点の丸木橋が現れるが、この橋を慎重に渡れば3つめの渡渉点であるが、この丸木橋は危険なのでその手前で左の踏み跡を下り沢を渡渉した方がよいだろう。赤布がつけられているので迷うことはない。この沢は普段は枯れているが、雨の日は意外に水量が多く渡渉に苦勞する。渡渉したら赤布に従い少し右に登ると丸木橋からの道と合流する。合流後すぐに左折

し、尾根を越えるところで今度は右折したまもや暗いヒノキ林に入る。ところどころヒノキ林がなくなり、そういうところでは、ヒメシャラやアブラチャン、ブナやカエデ類が明るい林を作っており心がやすらぐ。ヒノキ林の中は多少踏み跡が入り乱れるが、林床には何もないので、読図ポイントを見逃すようなことはないだろう。トラロープがかけられた沢を2つ超える。道を見失いやすいところである。踏み跡をしっかりと見て、赤布や小さいケルン等をたどっていこう。やがて沢の左岸から沢の中を道が通ようになる。ヒノキ林を抜け明るい広葉樹林帯になると、赤布に従い沢から左の小尾根に移る。少しの急登で稜線（愛鷹山分岐）に到着する。アブラチャンやマユミに混ざってブナの大木が見られる。

ここから、馬場平^{ばばだいら}までは、大変ぬかるんだ滑りやすい急登であり、一気に体力を吸い取られる。晴れていれば、田子の浦から富士・富士宮方面の景色が素晴らしい場所でもあるので、時おり振り返ってあせらずにゆっくり景観を楽しみながら登りたいところである。やがて馬場平の一角に出る。ブナの巨木とアセビ、ヒメシャラが目立つ。いったん少し下り、また緩く登ると馬場平に到着する。ここはいつ訪れても素晴らしいが、大会の頃はブナ、ヒメシャラ、アブラチャンの新緑が盛りであろう。この辺りは道が少しわかりにくいので、赤布を追って慎重に進む。ブナの大木を右に見ながら下りはじめ、すぐにコルに着く。この辺りからアシタカツツジが現れ始める。アシタカツツジは愛鷹山系と天子ヶ岳^{てんしがだけ}周辺の固有種である。同じ赤紫色の花が咲くトウゴクミツバツツジと似ているが、トウゴクミツバツツジはその名の通り葉が3枚輪生するのに対し、アシタカツツジは葉が5枚で互生している。トウゴクミツバツツジに比べて花がやや小ぶりであり、花期がやや遅い。愛鷹山系にはこの他にミツバツツジとスルガヤマツツジという別の野生のツツジもある。ミツバツツジはその名の通り、葉が3枚輪生しトウゴクミツバツツジと似ているが、トウゴクミツバツツジは雄しべが10本あるのに対して、ミツバツツジは雄しべが5本である。また、トウゴクミツバツツジは葉と同時に花が咲き始めるが、ミツバツツジは先に花だけ咲いて、そのあとに葉が出てくるという違いがある。また、スルガヤマツツジは花の色が朱色で、分布する標高も低く麓から700~800mまでなので、他のツツジとはすぐに区別できる。

一登りすると小ピーク帯になる。尾根がやや細いので滑落に注意しよう。ブナ、アセビ、ミズナラ、リョウブの疎林の間から富士市方面の展望が得られ、ドウダンツツジの垂れ下がった白い花やトウゴクミツバツツジの赤紫の花が見られる。急な下りを経て袴腰岳手前の鞍部に着く。このあたりからはアシタカツツジに代わりトウゴクミツバツツジが多くなる。鞍部から登り返すと袴腰岳に到着する。展望はまったく得られないが、ブナ、アセビ、ヒメシャラの樹林の間にトウゴクミツバツツジ、コアジサイ、ベニドウダンなどの可憐な花が咲いている。

ここからも相変わらず気持ちのいいブナ林が続き、オオモミジやイタヤカエデなどのカエデ類も多い。やがて細い尾根につきあげ右折する。ここから緩く登っていき、わずかに下って一服峠^{いっぷくとうげ}に到着する。正面に鋸岳、越前岳、富士山が重なって見える。西側や北側の展望が得られるのはここが最後なので、しっかり目に焼き付けておこう。右折して少し下るとロープが現れ、これに誘導されながら右の方へ下っていく。ヒメシャラやリョウブにブナの巨木が混ざる林を下っていくと、1250m付近で緩くなり、ここが体力審査等の終了地点である。

ここからも、すばらしいブナ林の中の下りが続く。倒木が道を塞いでいるところが何か所かあるが、そんなときは周囲を見渡せば、必ず回り道があるので落ち着いて探そう。1120mあたりで左の尾根から右の尾根に移り、少し下ると右手にヒノキの人工林が現れ、薄暗い林の下りになる。1010mあたりで灌木の茂る伐採跡地に出る。ここからは伐採のときに作られた作業道の下りとなる。途中愛鷹登山道に出る分岐があるが、そちらには向かわず直進する。やがて石がゴロゴロした足場の悪い下りになり、その先で(870~880m) 痩せ尾根に出る。疲労がたまり、審査も終わり気が緩むところなので、もう一度気を引き締めて慎重に通過しよう。少し下ると防鹿柵が現れ右の林の中に入る。真新しい伐採地の上に出る。今朝通ったブルドーザー道の伐採地の上縁にいることになる。愛鷹山登山口がよく見える。再び尾根に出ると、あと少しでハシゴ場である。最後に慎重にはしごを下り、林道に降り立つ。ここからは林道をひたすら第1ゲート、水神社経由で桃沢野外活動センターへ戻るだけである。水神社からは車の通行があるので、十分気をつけよう。

*参考文献 愛鷹山 吉原市教育委員会

愛鷹山と野生のツツジ 富士山ネイチャークラブ